



# 史傳

## 大題小題一

### 山撥鼠の裁判

米 溪

ダニール、ウエブスター、父はエビ子ザー、ウエブスター、と云ひ、片田舎に住へる、撲直なる農家の主にして、其の住居の邊には果樹園を有し、培ひ養ふことに心して、長閑かなる月日を送りぬるが、家には鼠あり、畑には烏ある譬として、此の果園も、其の住居の近傍の穴に巢を構へたる、山撥鼠の荒す所となり、汗と膏とに、切角育て上げし天與の賜も、此の無頓着なる小盜に掠められ

て、今日こそと樂み、今日一日として熟するを俟ちしものなど、一步先たつて、彼の賞玩となり終りしことも度々なりき。

ダニール其の頃は未だ十一二歳なりしか、彼の兄エゼキールと共に、如何にもして、此の犯罪者を捕へんものと企て、係蹄を設けて待ちつゝ、案の如く遂に之を得たり。

是に於て、エゼキールハ、直に之を殺して永遠に其の害を除かんことを言ひ出せしか、ダニール其の捕はれたる動物の様子の、如何にも溫柔にして、而も遂に一言仰て情を訴へんとするも能はず伏して哭せんとするも聲なき様を見るや、何となく同情の感に撃れ、惻愍の心油然而として起り、終に之を殺すに忍びず、再び之を放たんことを主張し、互に論争し、相譲らず、竟に之を父に訴へて

て、其の裁斷を請ふこととなりぬ。

父も之を聞くや、誠に興あることなし、遂に其の山撥鼠を指しなから、兄弟に告げぬ。

「よし、我之を裁すべし、此に一の囚徒在り、

之れ刑事の被告なり、今、之を殺すべきか、

將た放免すべきかは、汝等の辯論によりて定

まる、汝等夫れ充分其の利害得喪を辯ぜよ？

公判は開かれぬ。辯護士と検事は互に相對した

り。之より如何なる辯論を聞くべきか。……

検事たるべきエゼキール先づ鋭き論鋒を以て、

山撥鼠の瘴惡なる天性を有ることより、從來彼

か果園に及ぼしたる大害を述べ、幾多の時と努力

は此の囚奴の爲に費やされしことなるに、今再び

彼を放つて、其の生を保たしめんには、更に大害

を醸し、剽掠の道を新にすべく、且つ、奸智あり

て、出沒の妙極むることなれば、其の場合に至りて、更に捕へんとするは、到底望むべからざることなれば、今に及んで之を殺すを適當とすることを説き、遂に一歩を進めて、其の毛皮の世に珍重せられて、價貴きものにして、エゼキール自身、巧み之を造り得ることを附加し、假令斯の如くしても、尙從來被りし害の半ばをだに賠ふも難き程、彼の果園を荒すことの甚一々を論じて局を結びぬ。

其の辯論の明晰なる、才幹の横溢せる、強大なる精力あるに至りては、實際之を筆にし、之を紙に述べたるものを見て、吾人が感ずるよりは、一層精確にして、力あるものあり、蓋し、此の時既に彼が將來有名なる法學者たるべき性格は、大に發揮せられたりと云ふべきなり。

判事たる父は、其の子の辯論を傾聴し、頗る得色あり。是に於てダニールを顧みて曰く。

「ダニール！汝の言ふべき時は來ぬ。イザ其の辯論を聞かん。

ダニール、先づ其の兄の辯論の、克く判事たる父を動かさしを知るや、彼は其の輝ける大なる、黒眼勝の眼を上げて、其の溫柔なる、憶病氣に見ゆる動物を見しが、囚奴は小さき、挾き箱の内に捕へられて、身の行末も覺束なげに、恐れを以て戰慄せるを見るや、其の心に漲れる全情は、忽ち彼を動かして、雄大の辯論となり、斷然として其の放免せらるべきものなるを論じぬ。

「天の山撥鼠を生ずるや、唯之をして其の生を完くせしめんとなり。瀬々たる春和、晴朗なる空氣の内に嬉々として、自由の野邊と、好

む所の木の間に、其の生を樂ましめんとなり。獨り彼のみならず。天の万物を生ずる、豈偶然ならんや。人既に生を此の土に奪んじ、万物各其所を得、山撥鼠亦同じく天恵によりて茲土に生せるもの、誰れか其の自由の生活を拒まんとするものぞ、誰れか其の天與の權を奪はんとするものぞ。況んや、眇たる此の一小獸、固より豺狼の如く、狐狸の如く、自然の序を破壞するものにあらざるをや。彼果して何の犯せる所あるか、唯僅かに數顆の（其も普通の）果物を食へるのみにあらずや。果實何者ぞ、纍々園圃に産する所、而も尙ほ其の數顆を吝まんとするか。吁彼は其の質素なる生活を維持せんが爲に要する些少の食物を涉獵することの外は、決して何物をも、

オ一何處に生物界の秩序を亂せるが如きこと  
 あるか。此の僅々數顆の果實こそ、實に彼に  
 對しては、滋味として味はるゝ所なれ、賴て  
 其の生を支ふるなり、以て其の命を得る所以  
 なり、之れ兒供等が食卓に就て其の母の調理  
 せる食物を味ふと、何の撰ぶ所ぞ。  
 天既に生を彼に賦す、敢て食を備へずんばあ  
 らず。何を以てか之を咎むるを得んや、果實  
 の纍々たるは天恵に頼る。理正に園主の幸た  
 り、然り幸たりと雖ども、其の之をして纍々  
 たらしむる以所のもの豈偶然ならんや。園主  
 既に昊天賦與の恩に浴す。彼獨り分賦の恵を  
 受くるなくして止まんや。等しく之れ地上の  
 生物なり、不幸にして口其の正當の權利を主  
 張する能はずと雖ども、何者か數顆を吝むで

三十八  
 天意を無視し、敢て其の權利を蹂躪し去るを  
 得るものぞ、且つ試に思へ、此の動物果して  
 其の天性に戻り、自然の秩序を攪亂せるもの  
 のあるか人こそ却て屢は之をなすにわらず  
 や、彼今果して奈何の事をかなしむ唯其の賦  
 性に從ひ、害無き其の本能によりて、万物を  
 造る造物者の手より、僅かの顆物を受取りし  
 のみ。  
 天彼を生ず、彼自から權利あり。之れ所謂天  
 賦の權なり。以て生を保つべく、以て其の食  
 を得べく、以て自由に行動すべし。何者か遂  
 に、之を困め得る權あらんや。  
 斯く論じて彼は益精力を加へ、其の父兄が已  
 を愛するが如く、其の動物に對して愉快に大切に、  
 其の生命の助けざるべからざるを論じ、聽くもの

をして、自から、若し殘忍自から用ひ、冷靜情なきものにあらざるよりは、必ずや之を放免するならんと豫想せしむる迄に論究し且つ曰く。

「吁其の生や、一度之を絶たば、冤魂遂に再び返すべからず、吁……之を奪ふもの果して其の生を興へ得るものか。吾れは唯其の生命は天獨り之を賦與し得るものなることを知る。

と述ぶるや。年老いたる判事は之れ迄は唯肅として傾聴したりしか、心酔へるが如く、感想不知に識に動き、涙いつしか溢れて日に焦けたる赤黒き頬を傳ふこと數行、彼の眼前に於て、熱心に其の動物を辯護せる少年の、偉大なる未來を想見して、天此の兒に幸して、遂に万衆の儀表に立つべき運命を有せることを知りぬ。

彼の哀憐の情と惻隱の心は、同情と慈悲の心に充ち満ちたる辯論によりて喚起せられたり。是に於てか、ダニール未だ其の訴訟に勝利を得しとも思はず、熱心に其の辯論を續げんとするに、判事は之を裁斷することをも忘れたるが如く、突然起て椅子を離れ、エゼキールを回顧し、涙を眼に漲らしつゝ曰く。

「エゼキール！エゼキール！其の山撥鼠を放ち遣れ!!!

Every door may be shut, but beath's door.

死の門の他は何れの門も閉ぢられ得へし